

研究ノート

同時代人のジョン・ロック批判
ジェイムズ・ロウドとジョン・エドワーズ

妹 尾 剛 光

Criticisms of John Locke by Two Contemporaries :
James Lowde and John Edwards

Goko SENO

Abstract

Lowde thought that God created man in his own image, so that in man existed knowledge and righteousness, which man has not wholly lost by the sin of Adam, but that faith and repentance have come to be absolutely necessary to reach evangelical perfection, and on the basis of this thought he criticized atheists, “patrons of vice and error”, especially their representative Hobbes who set up as the fundamental principle “self-preservation of man born unfit for society”. As for Locke, Lowde approved of his demonstration of the existence of a God, but criticized his founding virtue and vice on praise or blame, his assertion that there are no innate principles, and his thought on general maxims. Locke’s counter argument against the first point is invalid. Edwards(anon.) almost wholly accepted Stillingfleet’s and Edwards’s arguments in their respective religious controversies with Locke, and completely neglected Locke’s. Thus he considered Locke a friend to Socinianism, and asserted that he was a sceptic with some of Hobbes’s very thoughts.

Key words : John Locke, Thomas Hobbes, Niccolò Machiavelli, James Lowde, John Edwards, Socinians, atheism, human nature, reason, interest.

抄 録

ロウドは、「神は人間を神の似姿として作られ、従って、人間には知識と正しさがあつた。人間はこれをアダム
の罪によって完全に失つたのではないけれども、しかし、福音の完全に到るためには信仰と悔い改めが必要である。」という考えを基にして、「悪徳と誤りの守護者」無神論者を批判し、その代表者として「社会にふさわしくない個人が生き続けること」を大前提とするホッブズを批判した。ロックに対しては、神の存在証明を評価したが、徳・悪徳を称賛・非難に基づかせているところ、「生まれながらの原理はない」という主張、一般公準についての考えを批判した。ロックの反論は、第一の点に関しては、成功していない。エドワーズ(匿名)は、ロックの宗教論争において、ステイリングフリート、エドワーズの言い分をほぼ全面的に認め、ロックの言い分は何も認めていない。こうしてロックはソツティーニ派の支持者とされ、ホッブズと同じ考えの懐疑論者と断定された。

キーワード：ジョン・ロック、トマス・ホッブズ、ニココロ・マキアヴェッリ、ジェイムズ・ロウド、ジョン・エドワーズ、ソツティーニ派、無神論、人間の自然、理性、利益。

1. ジェイムズ・ロウド『人間本性論』1694.

ロック『人間知性論』*HU*に対する批判が書かれていて、ロックが応答したもの一つに、ジェイムズ・ロウド James Lowde(c.1640-1699. 1669年 Clare-hall, CambridgeのFellowとされ、1679年からEasington, Yorkshire, 1684年からは更にSettrington, Yorkshireの教区司祭 Rectorであった)の主著 *A Discourse Concerning the Nature of Man, Both in his Natural and Political Capacity : Both as he is a Rational Creature, and Member of a Civil Society. With an Examination of some of Mr. Hobbs's Opinions relating hereunto* (『自然と政治両方の立場にある、理性的被造物であり、市民社会の構成員でもある、人間の本性論。これに関わるホッブズ氏の考えの幾つかの吟味を付す。』), London, Walter Kettilby, 1694.(カンタベリ大主教 John Tillotsonに対する献辞が付けられている)がある。本書の内容は、次の通りである。

読者への序

本書の意図は、自然Natureと理性の名の下に宗教を信じない無神論者(悪徳と誤りの守護者)に対して、本来の自然と理性を擁護することである。

これと関連して、ホッブズHobbs氏の考えの問題点を指摘する。ホッブズは、特定の個体の観察から普遍的結論を導き出している。また、単なる事実からあることの正しさを結論している。彼が、最もすぐれた道徳哲学者や政治家の考察を無視して、自分の想像即ち「自分が生き続けること」の原理を基にする、人間性観察の浅薄さこそが、彼の考えの誤りを作り出した、と言える。

一方、*HU*の著者〔ロック〕は、徳・悪徳を称賛・非難に基づかせる(*HU*, II, XXVIII, 11.) ことにより、悪徳を徳に、徳を悪徳にしている¹⁾。

第1章 人間の自己知識の本性Natureと卓越について

ホッブズの「自分の中を見ることによって、他のすべての人の考えや情念は何かを知る」[*L*, Introduction, p. 2.] 方法は、一人の人間を人間性一般の尺度とすることであり、不都合である²⁾。

1) Lowde, The Preface.

2) Lowde, I, pp. 2-3.

「人間の自己知識」を基にして、人間は、「神の存在、本性Nature、礼拝についての知識」へと導かれる。

1. 神は、神の観念を人間に生まれつき与えられている。神は、人間を神の似姿として作られ、神の観念は人間の諸能力、特に、真理や善の観念と調和している。神の観念からの神の實在の証明は、ウスター主教[スティリングフリート]の*Origines Sacrae* [1662]、カドワース Cudworth の *The True Intellectual System of the Universe* [1678]にある。

2. 人間の思考は、物質の力を越える(物質は考えることができない)、即ち、物質よりもすぐれており、より完全な霊Spiritの働きによる。神は、人間の中にある完全さをより高度のものとして持っていると言えるから、神の本性は、霊的である。

3. われわれは、魂SoulとからだBodyとから成っているから、この両者を(魂だけでなく、からだの行為をも)神に捧げなければならない³⁾。

第2章 魂とからだから成る人間について

からだを軽視し、魂を重視しすぎたストア派と、からだ(からだに基づく情念)を重視し、魂を軽視しすぎたエピクロス派を批判している⁴⁾。

更に、人間の無知、無力・不正という墮落に対して、神は、まず人間の蒙を啓き、次に恵みにより意志を[神の方に]向けられた、と書いた後、[Spinoza(anon.)]、*Tractatus Theologico-Politicus* [1670. 本書には英訳(anon.), *A TREATISE PARTLY THEOLOGICAL, And Partly POLITICAL, Containing some few DISCOURSES, To prove that the Liberty of PHILOSOPHIZING (that is Making Use of Natural Reason) may be allow'd without any prejudice to Piety, or to the Peace of any Common-wealth ; And that the Loss of Public Peace and Religion it self must necessarily follow, where such a Liberty of Reasoning is taken away*, London, 1689. があつたが、ロウドは、ラテン語版を使っている]1, 2章の預言に関する考えについて、人間の自然の力による知識と神の啓示とを、共に神に源があり、確実性において同等のものとして区別せず、また、聖書において預言はすべて人間の想像力を基にして、それに適う形で、即ち、言葉や映像によって啓示されていると考えるのは、ホップズの考えと同じく、弱く邪悪な考えである、と批判している⁵⁾。

3) Lowde, I, pp. 8-20. なお、Lowdeは、Appendix to VII, p. 237で、Stillingfleet, *A Letter to a Deist* [1677]の中の、聖書のすべては、たとえその中のある部分が人間に理解できないとしても、神の啓示による(p. 134.)、という考えに賛成している。

4) Lowde, II, pp. 23-24.

5) Lowde, II, pp. 36-49.

第3章 真理と善の生まれつきの観念について

考えの誤り，行ないの異端が現実によくある中で，神は，真理Truthのために，1. 人間の心への生まれつきの印刻natural impression(印刻とは、神は自然法を人間の心に自然なように作られた，という意味⁶⁾)と，2. それを説明し，確認させるための啓示とを与えられた⁷⁾。

1. に関しては，i. 「魂の先在」や，「知識は，〔前世で〕既に知っていたことを思い出すことにすぎない」ということを言っているのではない。ii. 「生まれつきの観念」は，外的感覚や先行する心の開発Cultivationの助けなしに力を発揮するのではない（理性的場合と同じことである）。iii. 魂は，「その真理が感覚や観念の証拠に依存しない原理・命題」を見出し，あるいは，作る生まれつきの力を持っている。知識は，感覚経験の対象より広範囲にわたっているし，また，個々の観察の積み重ねと一般的真理とは別のものである⁸⁾。

われわれの能力の自然の結果，誤りが生ずる，とは言えない。i. 人間の自然にある理性は，誤りとは相容れない。ii. 「限りなく賢く，正しく，慈愛深い神」の本性からして，明確，明瞭な知覚において誤らせるような能力を人間に与えられた，とは考えられない。神の似姿the Image of Godとして作られ，「知性と意志の資質・完全，即ち，知識と正しさ」があった人間の能力は，アダムの罪によって，誤りうるものとなったけれども，真理を知覚できなくなったのではない（このことは，聖書にも示されている⁹⁾）。

神の知性が正しいあるいはよいと認めたものは，神の任意の・自由な意志によっては変らない。「矛盾することの両方が同時に真であることはありえない」ということは必然の真理であるし，また，神はそうしようと思えば，道徳の善に関する体系を現在あるものとは正反対のものに定めえた，とは言えない。そして神は，人間に神の光と法とに対応するものを与えられた¹⁰⁾。

2. に関しては，三位一体やキリストに対する信仰は，自然の光によっては知られえない。しかし，道徳の義務は，キリスト教がはじめて啓示したものではなく，既に知られていた義務をキリスト教はより明確にし，確認したのである¹¹⁾。

これらの考えを基にして，Dr. Parker（前Oxford主教），Des Cartes, Cumberland

6) Lowde, III, p. 75.

7) Lowde, III, p. 51.

8) Lowde, III, pp. 52-56.

9) Lowde, III, pp. 58-61, pp. 87-88, p. 96, VII, pp. 202-203.

10) Lowde, III, pp. 63-68, pp. 95-105, Appendix to VII, p. 230.

11) Lowde, III, p. 115. Cf. Lowde, Appendix to VII, p. 231.

(Peterborough主教), Norris, Poiret, Cuperus の考えを批判している。

ロックの*HU*第1巻の「〔心に〕生まれながらの原理はない」という主張に対しては、次のように批判している。

1. ロックが挙げている理由の一つは、「子供や白痴はこのような原理を知らない」ということである。しかし、「生まれつきの観念」を主張する人々は、この観念を「幾つかの他の事情が同時に起こることに基づく条件的なもの」と考えている。こうしてTyrrellがHobsに対して言うように「人間の自然の尺度を、ホブズのように、理性の使用に先立つ〔子供や愚か者に見られる〕情念に置くのではなくて、人間の中の最も完全なもの、即ち、理性に置くべきである」。また、ロックは、「一般公準は、提示されて、言葉が正しく理解されるとすぐに同意される」と言われているけれども、「りんごは牡蛎ではない」、「黒は白ではない」などの、生まれつきのものではない命題の方が、一般公準よりも容易に同意される、と言う。しかし、一般公準は直観により知られる直観的知識であるのに対し、例示された「AはBではない」という命題は物の現実存在と〔二つの〕言葉の一致・不一致とを基にして知られるのである¹²⁾。

2. 「生まれつきの観念」を主張する人々は、この観念が魂に完全な存在として刻み込まれているのではなくて、これは魂の生まれつきの特質（理性・宗教信仰あるものであるという特質）である、と考えている。神の知性にあるアイデア（真理の原型）が人間の魂にコミュニケーションされる、と考えている¹³⁾。

第4章 神の存在について

「神信仰は、国王・君主、教会聖職者により、彼等の利益のために作り出され、維持されてきた」という無神論者の主張に対して、次のように反論している。

1. 「当事者の利益と結びついている宗教信念・実践は誤りである」という彼等の根底にある考えは、誤りである。人間の自然においては、善・義務と利益とは結びついており、何らかの利益と結びついていない行為はないから、この彼等の考えに従うならば、真理・理性にかなう行為はないことになる。

2. この主張は、キリスト教徒が迫害、財産没収、殉教を受けていた時代に関しては、成り立たない。

3. 無神論者は、酒色にふける生活を行っており、神はいないということは、そのよ

12) Lowde, III, pp. 77-81. Cf. Lowde, IV, pp. 135-137. p. 146.

13) Lowde, III, pp. 82-83.

うな生活を正当化する、邪悪な人間の利益である。従って、そのような信念は間違っているということになる¹⁴⁾。

神の存在の不可能の証明はないし、ありえない。また、「神の存在の証明ができないが故に、神の存在は確実でない」ということにはならない¹⁵⁾。

神の存在を証明しようとする議論の中では、次の二つが最も重要である。

1. この世のもの（魂を含む）に見られる神〔創造主〕の力と知恵を基にする議論。
2. 人間の普遍的同意、その根拠としての「人間の心への生まれつきの神の印刻」を基にする議論。

無からは何も生まれえないから、何かが永遠からあったにちがいない。ロックが言うように、この何かは物質ではない。何故ならば、物質であれば、知識や思考は作り出されえないから〔*HU*, IV, X, 10.〕。人間は、自分よりはるかに完全な存在の観念を持っている。しかし、自分自身は不完全であるから、この不完全な自分の存在を完全な存在に負っている。人間の中には、完全な存在の観念と推論とが、更に加えて、考え、推論を神の存在へと向けさせるものが、心への印刻として、備わっている¹⁶⁾。

以上の議論に続いて、神の存在証明についてのCuperusとTyrrellの考えを批判している。

第5章 自然状態は対等の状態でも、戦争状態でもない

Hobbs, *Leviathan*, 第4章について。

欺瞞と暴力が支配し、互いに敵である戦争状態にある自然状態で、人間は常に自分の利益だけを考えているとすれば、言葉の使われ方〔*L*, 1, 4, pp. 12-13.〕としてホッブズが挙げている「友人としての助言」を信じる余地はない。

また、ホッブズは、知識の獲得には言葉の意味の明確な定義が必要である〔*L*, 1, 4, p. 15.〕と言うが、彼は、Natureの明確な定義を与えていない（Natureの定義としては、原初の純粹素朴なNatureと墮落したNatureとの区別が必要）。「人間は、自然によってby Nature（生まれつき）邪悪である」という時は、Natureは「動物と共通する資質」の意味であるし、「神は、自然によって、即ち、自然理性の命令によって、あらゆる支配者の支配者である」という時は、魂のより高次の能力を指している¹⁷⁾。

Hobbs, *Leviathan*, 第13章について。

14) Lowde, IV, pp. 122-126.

15) Lowde, IV, p. 122, pp. 126-127.

16) Lowde, IV, pp. 130-135.

17) Lowde, V, pp. 149-152.

1. 「人間の自然状態は対等の状態である」について。

「最も弱い者でも、最も強い者を殺すことができる、というからだの力の対等」[L, 1, 13, p. 60.] が、どうして「政治における、すべての人間の対等」を証明することができるのかは、わからない。

心の能力については、「賢明Prudenceは、体験に他ならず、体験は、同じ時間には、すべての人間に同じだけ与えられている」[L, 1, 13, pp. 60-61.] と言う。しかし、心の能力は賢明だけではないし、賢明は単なる体験以上のもの、即ち、心の習性となった性質である。これは、人によりさまざまである。その上、人間は、父と子の関係において生まれてくるから、人間には、従属関係と服従の義務がある¹⁸⁾。

2. 「自然状態は戦争状態である」について。

統治権を得ようとして「競争相手を減らし、あるいは、服従させようとする者」は、ホッブズが言うように、すべての人間ではなく、過剰な己惚と野心にかられた人間にすぎない。また、このようにして権力を奪おうとする者は、ホッブズが「謀反によって主権を手に入れようとする者」について言っている通り [L, 1, 15, p. 73.]、理性に反しており、自分が生き続けるための一番適切な方法を使っているとは言えない¹⁹⁾。

ホッブズは、「アメリカの多くの地域の野蛮人は、生まれつきの欲望natural lustに基づいて和合している小家族の統治を除けば、何の統治も持っていない」[L, 1, 13, p. 63.] と言う。——この小家族の統治は、ホッブズの言う戦争状態とは相容れない。ホッブズは、1. この家族は小さい、2. 和合は生まれつきの欲望に基づいている、ことを指摘している。しかし、1. 統治の権利は、小家族にもある。2. 和合の根拠が何であれ、家族の状態は、ホッブズの言うような自然状態とは相容れない。ホッブズに従えば、生まれつきの欲望は戦争の原因であり、また、和合の原因でもあることになる。ここには、曖昧さがある²⁰⁾。

正義やその他の道徳的義務の実践は、社会を前提にしている。しかし、その義務の根拠は、個々の人間の（神が自分に似せて作られた）自然の中にある。神は、われわれの義務と利益とを縫い合わせられたけれども、義務の根拠を社会、コモン・ウェルスの支えや利益に還元することはできない。ホッブズには、「すべての人間にその人間のものを与えようとする、現実の心からの欲求」を正義と考えているところがある [PR, XVIII, 3. L, 3, 43, p. 322.]。この考えは、正義を人間の自然に基礎づけている。しかし、善・悪、正・邪を世俗

18) Lowde, V, pp. 153-155.

19) Lowde, V, pp. 155-157.

20) Lowde, V, pp. 157-161.

為政者の意志に基づかせるホッブズ独自の考えは、無神論か、あるいは、「この世の統治に自分は関わらず、すべてをこの地上の代理者〔為政者〕に任せる神」を前提にしていることになる²¹⁾。

ホッブズの統治論、宗教論の間違ひは、人間論における誤った原理に基づいている。ホッブズは、「人間は生まれつき社会的なものである」ことを否定はしていないけれども、「人間は、社会にふさわしいように生まれついてはいない。教育によって社会にふさわしくなる。」と言う。しかし、人間は、成長すれば社会にふさわしいものになる資質を持って生まれてくる、という意味で、社会的なものであると言える。1. 人間の自然からそう言える。基本的自然法「自分がしてほしいように、他の人々にしなさい」は、社会を想定している。2. 人間の必要から。人間は、生き続けるためには、他者の助け、援助を必要としている²²⁾。

ホッブズは、自然状態において、本当の意味での自然法を認めてはいない。自然法は、「われわれを義務づける法というよりは、平和へと向かわせる原則あるいは公準にすぎない」[L, 1, 15, p. 80.]と書いている。しかし、自然法は理性の命令であり、また、自分が生き続けるための（ホッブズの言う自然権よりは）適切な手段でもあるから、人間にとっては義務である。

ホッブズの原理は、自分が生き続けることを大前提として、あらゆる悪業、あらゆる暴力、不正を法に適用ものとするところにある。これは、君主に「自分の利益のみを考慮して、同盟や誓約を義務と考える必要はない」ことを教えたマキアヴェッリMachiavelと似ている。マキアヴェッリが君主に関して言ったことを、ホッブズはすべての人間に関して言ったのである。しかし、1. ホッブズのこの前提は、十分に証明されたものというよりは、想定されているだけの仮説である。ホッブズは、自然状態を「人間が、互いの間の統治〔約束〕が何もなくて、突然成人となった」状態〔PR, VIII, 1.〕と考えている。2. 普通の仮説に必要な条件を欠いている。仮説は、i. 可能なpossible、否、ありそうなprobableものでなければならない。ii. 首尾一貫したものでなければならない。iii. 真の、役に立つ知識を探し求め、信仰心を促進するものでなければならない²³⁾。

ホッブズは、「個人の利益」、「自分が生き続けるということ」を人間行為の究極の大目的としている。

21) Lowde, V, pp. 161-163.

22) Lowde, V, pp. 163-165.

23) Lowde, V, pp. 165-171.

1. 神が人間の中に「自分が生き続けようとする原理 (力)」を刻みつけたということは、本当であり、また、〔神の似姿として作られた人間に対する〕神の慈愛に適い、賢明と信仰心をこの世で推し進めるのに役に立つ。その上、他者に対する愛の基準は、自分に対する愛である。しかし、ホップズは、自分が生き続けることを、そこで使われる手段の如何を問わず、理性と自然の第一の大命令であると考えて、キリスト教の殉教者を愚かであると批難している [L, 3, 42, p. 271.]。そこでは、ナアマンNaamanの例 [2 Kings, 5:18.] を引いて、心の中で真の神を信じ、主権者に命じられて、言葉で信じていないと告白することは許される、と書いている。しかし、ナアマンはそこで、「主以外の他の神々に献げ物やいけにえをささげることはしません」と公に言っているから、口で本当の神を否定してはいない²⁴⁾。

2. 神は人間の本当の利益と相反することを命ずることはないし、また、神に対する人間の愛には、人間に対する神の配慮の考察が混ざっていることが多い。しかし、神に対する愛は、本来は神自身に向けられるべきものである。従って、そのような神への愛は、正当とはされえない無茶な考え・実践を認めることになったり、ある人々の完全さがすべての人々に法として課せられるということがない限り、反対されるべきものではない²⁵⁾。

3. 極度の必要 (生命の危険) がある場合、それ以外の場合には許されないことが許される。しかし、ホップズの言うような「楽しみのため」の場合は、許されない。更に、この必要は現実のものであって、想像されているものであってはならず、緊急、不可避のものでなければならない²⁶⁾。

[4]. 宗教のために、神の恵みを信じて、はかなく短い、苦しみの多いこの世の生と別れて、自分の生命を棄てることの理にかなっていることは、それに反対する主張が、神の權威、慈愛、啓示を認めておらず、理にかなっていないことから明らかである²⁷⁾。

第6章 宗教は市民統治の最善の基礎。これに関するマキアヴェッリの考えの幾つかの検討を付す

宗教は、社会の統治と調和している。

1. 宗教は、永遠の幸福に到る唯一の手段である。そして神がこの世に統治を設立された目的の一つは、人間を、神、自分自身、他の人間に対し義務を行なうのによりよい状態に置くことであった。従って、宗教と統治とは、人間の幸福という共通の目的のために作

24) Lowde, V, pp. 171-175.

25) Lowde, V, pp. 175-177.

26) Lowde, V, pp. 177-179.

27) Lowde, V, pp. 179-180.

られたものであって、矛盾するものではない。

2. 統治は、究極目的である永遠の幸福という点では、宗教に従属しているけれども、それ以外の多くの点（霊の事柄を除く）では、教会は国家に従属している。しかし、これは、神の意志に基づく、非本質的な従属である。国家が自分の利益のために教会の法を破ってよいとされたのではない²⁸⁾。

宗教は統治の最善の基礎である。

1. 世俗権力civil powerの源は神にあると主張することによって。
2. 誓約を守る義務を宗教（良心）に基づかせることによって。
3. 人間社会を破壊する誤った考え、原理に反駁して、これを正すことによって。
4. 戦争、不和を助長する欲望・情念を人間の心から取り除くことによって²⁹⁾。

「神から与えられていなければ、あなた〔主権者〕はわたし〔イエス〕に対して何の権限もないはずだ」（ヨハネ伝 19:11.）。これは、すべての世俗権力に関して言える。ホップズ、グロティウスGrotiusは、世俗権力は人々の同意から作られたと考えて、そこに神の関与を認めていない。しかし、人間が生まれつき自由であるならば、どの子も同意の権利を主張して、統治は崩壊するであろう。神が定めた義務こそは、人間を服従させておくものである³⁰⁾。

統治が神の恵みGraceに基づいているということは、キリスト者である国王のすべてが現実に敬虔で信仰篤いということではない。また、神は時には邪悪な君主をも正義の道具として使って、他の君主の罪を罰せられる。しかし、このことは、邪悪な君主の罪を減ずるのではない。これはその罪を減ずるという考えは、救い主がその教えと行ないによって絶えず支えようとしてきた、あらゆる市民社会を崩壊させるであろう³¹⁾。

マキアヴェッリの考えは、「君主は信仰篤く装うべきであるけれども、本当に現実にそうである必要はない」、自分個人あるいは国家の利益のためには、誓約や正義・名誉の法を破ってもかまわない、ということである。

しかし、偽善、裏切が有効なのは一度だけで、それがわかれば、信仰篤いという評判はすばやく消える。不信仰は、君主の名誉でも、利益でもない。1. 邪悪であることは、どんな人間の名誉でもない。君主といえども、神と自然の課した義務の下にある。i. 多くの人々は邪悪な

28) Lowde, VI, pp. 182-184.

29) Lowde, VI, pp. 184-185.

30) Lowde, VI, pp. 186-190.

31) Lowde, VI, p. 193.

人々の行為を嫌悪するし、明確な無神論者たちが国、社会を作ることは不可能である。ii. 邪悪な人々が罪を誇るの、同じく邪悪な人々の前でであり、同じような仲間がいることを知って喜ぶためである。iii. 邪悪な人々自身が他人の邪悪を非難している。2. 邪悪であることは、君主の利益ではない。邪悪は統治の根幹を弱めるし、臣民を同じ邪悪に導きやすい。邪悪な臣民は国内の平和を乱し、国外での戦争を適切に行なわないために、君主にとって不利益である³²⁾。

マキアヴェッリは、賢明、有徳の故に嫌悪される君主もあると言うけれども、邪悪な君主の方がはるかに大きく嫌われる。マキアヴェッリは更に、キリスト教は人々の精神を柔弱にし、キリスト教世界を侵略者の餌食にした、と言う。しかし、堅い神信仰、魂の不死信仰、正義への献身は、真の勇気の最善の基盤である³³⁾。

第7章 道徳の徳について

道徳の徳は、神の似姿として作られた人間に最初から備わっていたものであり、人間の墮落以後も、不完全ではあるけれども、人間の自然に備わっている。しかし、人間の墮落した状態においては〔福音の完全に到るためには〕信仰と悔い改めは絶対に必要なものである。従って、「道徳の徳とは、……心の習慣であり、〔人間の〕自然の中に根を持っているけれども、頻繁に使い、働かせることによって完全なものになる。この習慣によって、人間は自然の本源の力だけによって、自分自身、自分以外の人々、及び、神の三者に対する関係において、自分の自然の義務と威厳〔卓越〕〔即ち、本源的なものである「神性に与る霊、理性、道徳能力」、及び、後に神の慈愛によって与えられた〔聖書に書かれている〕神との結びつき〕に一番ふさわしいことをすることができる。」³⁴⁾

第8章 ホッブズ氏の闇の国の最初の章〔L, 4, 44.〕に関する短い考察

「闇の国」(諸霊Spiritsは幻想ではなくて、非物質の存在であると信じている教会も、この闇を免れていない)を作り出す第一の原因は、聖書の誤解である、とホッブズは言う³⁵⁾。

1. 「この世の教会を聖書にある神の国とする」誤解について。

ホッブズは、神の国はモーセの働きによりユダヤ人の国として設立されたけれども、サウルを王に選んだ時に、消滅した、と言う。ホッブズは、アブラハムとモーセの下でユダヤ人は、ホッブズの考える現世の王国設立と同じように、相互の契約により、権利を神に譲り渡して神の国を設立した、と考えている。しかし、1. その時、新約の下で今ある神

32) Lowde, VI, pp. 194-198.

33) Lowde, VI, pp. 198-200.

34) Lowde, VII, pp. 202-203, pp. 209-211.

35) Lowde, VIII, pp. 213-215.

の権利以上のものを神に与える契約条項が作られたということはない。2. 神は統治権を人々の選択と意志によって得るのではない。3. キリスト教の信仰告白をするということは、〔神との〕暗黙の契約を立てたということである。従って、地上の教会は、ユダヤ人の国が神の国と言われたのと同じ意味で、キリストの国と言ってよい³⁶⁾。

「聖書のほとんどの個所では、神の国は、イスラエルの人々の同意により設立されたという本来の意味で使われている」〔L, 3, 35, p. 216.〕ということは、私が述べた解釈に対する反論にはなりえない。ここでホップズが引いている創世記17:7.には、「神とアブラハムとの契約で、アブラハムは、自分と子孫が神……に従うと約束した〔ホップズの考える誓約を立てた〕」〔L, 3, 35, p. 216.〕ということは何もない。エレミヤ書31:31.の「新しい契約」も、「救い主が肉体を備えて来られて、福音の下での今の、そう呼ばれるのがふさわしい、神の国を証明される」という意味である。出エジプト記19:5.については、1. 人々が同意により神との契約を承認する場合に神は恵みを与えられる、という条件付の恵みであると読めるけれども、理性を使う者はこの条件を拒否することがないような恵みの授与である。2. 神は人間に対する「命令の権利」を持っているのであって、その場合人間の義務は、人間の受け容れのみによって生ずるのではない。3. 神はこの時ユダヤ人の同意を要求することによって、(人間の不完全さに応じて) 彼等の義務感を強められたのかもしれない³⁷⁾。

L, 4, 44, p. 335.では、ホップズは、「地上の今の教会は、キリストの国である」ということと、「今は天におられる救い主が地上の人々に語られる言葉を伝える一人の人間あるいは一団の人々が当然にいる」ということとが同じ意味の命題であるかのように言っているけれども、後者は前者から間違っ導き出された帰結にすぎない。地上の教会は、最初の四、五百年間、教皇のそのような権力なしにやってきたのである。また、ホップズは、「存在とは区別される本質」の起源は、アリストテレスの繫辞 (be動詞) の考察にあるかのように (事実反して) 書いて、これをけなしている〔L(L), 4, 46, pp. 498-499. Cf. L, 4, 46, pp. 371-373.〕³⁸⁾。

2. 「魂の不死及び魂はからだとは別のものである」という誤解〔L, 4, 44, pp. 343-346.〕について。

ホップズは、「霊は与え主である神に帰る」〔コヘレトの言葉12:7.〕は、「人間が死ぬ時その霊がどうなるかは、神だけが知っておられる」という意味だ〔L, 4, 44, p. 344.〕と言う。

36) Lowde, VIII, pp. 215-218.

37) Lowde, VIII, pp. 218-221.

38) Lowde, VIII, pp. 221-223.

しかし、そうだとすれば、どうしてホップズは、人間の霊の死や再生について明確に言うことができるのか。

マタイ伝22:32.で、アブラハム、イサク、ヤコブは「生きている」と救い主が言われていることに対して、ホップズは、神の約束により永遠の生命に確実に与るという意味で言われているのであって、現実に生きているのではない、と言う。そうであれば、「邪悪な者は永遠の死に確実に与る」とホップズは言うから、そのような者は「死んでいる」と言うのがよいことになる³⁹⁾。

以上が、エピクロス主義とホップズ主義の種々の変形にすぎない、現在流行のさまざまな理神論Theismに対する私の批判である⁴⁰⁾。

第7章への付論

第7章において、私は理神論（神の存在と自然宗教は認めるけれども、その後の神の啓示を否定する）、即ち、「人間の自然の弱さを正しく認めない己惚」、「墮落した人間の状態を十分に理解しない無知」、「神の恵みの利益に感謝しない感謝のなさ」の合成物に賛成したのではない。また、神の啓示を認めても、それを自然宗教とほとんど同じものにしてしまう者もいるし、口では神を認めると言いながら、あらゆる宗教に共通の原理である魂の不死や未来の世界を否定して、エピクロスの考えと変らない者もいる。

なるほど、1. 自然法は神の法であり、それと正反対のことが啓示されるということはある。2. 預言者や使徒は、神の意志を啓示する時に、聖霊の監督の下にはあるけれども、彼等の能力を理性に従い使う。3. 自然理性の光は、それ以外のものと一緒になって、聖書において神が啓示した意志の理解のために使われる。

しかし、自然の光は、それ以上のものではなく、神の啓示と対等のものではない。キリスト教の啓示のあるところでは、理性は、キリスト教信仰を他のどんな信仰よりも強く支持するはずである。

理神論者は、1. 預言者、救い主、使徒はいなかった、あるいは、2. 彼等は神の意志の新しい啓示を何もしなかった、ことを証明しなければならない。しかし、それはできないことである。

実践に関わる宗教の義務は、自然に根差し、理性に適うものである。しかし、啓示は、真理を明確にし、義務の必要性を示してきた。それは神の行ないであるから、不必要なも

39) Lowde, VIII, pp. 223-225.

40) Lowde, VIII, p. 226.

のとは考えられない⁴¹⁾。

これらの主張と関連して、この後、[anon.] *A Discourse of Humane Reason : With Relation to Matters of Religion*, London, Awnsham Churchill, 1690. 及び、Jean Le Clerc⁴²⁾ (anon.), *Five Letters Concerning the Inspiration of The Holy Scriptures Translated out of French*, 1690. 批判が書かれている。

こうして本書は、「無神論」(第8章の最後、第7章への付論では「理神論」と言い換えられ、「エピクロス主義とホップズ主義の変形」と書かれている) 批判の書物である。ロウダの基本的な考えは、こうである。

神は、人間(その魂)を神の似姿として作られ、「神の観念」や「感覚や観念の証拠に依存しない原理を見出し、作る力」を人間に生まれつき与えられている。但し、「生まれつきの観念」は、外的感覚や先行する心の開発の助けなしに力を発揮するのではない。神の似姿として作られた人間には、もともとは「知識と正しさ」があったけれども、この力はアダムの罪によって誤りうるもの、不完全なものとなった。しかし、それによって真理の知覚・徳の実践ができなくなったのではない。

この人間の自然の力を基にして、道徳の義務・徳が成り立つ。神は、人間の義務と利益とを縫り合わせられたけれども、義務の根拠は利益ではない。

神の知性が正しい、よいと認めたことは、神の意志によっては変らない。自然法と正反對のことが啓示されるということはありません。啓示は、この道徳の義務をより明確にし、確認した。更に、墮落した人間が福音の完全に到るためには、信仰と悔い改めが必要である。(第1章、第3章、第5章、第7章、第7章への付論)

41) Lowde, Appendix to VII, pp. 229-232. Cf. Lowde, III, p. 63. pp. 99-105.

42) Jean Le Clerc (1657-1736)

ジュネーヴ生れ。若い時にデカルトを学び、その基本的な考えを受け容れたが、ロックを始め、カドワース、ボイル、ニュートンらの影響を受けて、その考えを修正した。宗教については、理性は啓示を受け容れることができ、啓示は理性に反しない、即ち、理性と啓示は基本的に調和している、と考えた。従って、理性を使って考えた人々の考えが一致しない教義は信仰の本質ではないとして寛容を主張し、宗教における「熱狂」「狂信」に反対した。この宗教観の故に1683年ジュネーヴを追放されて、イギリスに渡り、同年のうちにアムステルダムに移って生涯ここに定住することになった。アムステルダムでは、レモンストラント派(アルミニウス派)の聖職者となり、その神学校のヘブライ語、文学、教会史の教授を歴任した。

1686年雑誌 *Bibliothèque Universelle et Historique* (-1693) を創刊し、これを継ぐ *Bibliothèque Choisie* (1703-1713), *Bibliothèque Ancienne et Moderne* (1714-1730) を刊行して、これらの誌上にロック、ケインブリッジ・プラトニスト、パークリなどイギリス哲学者の諸研究の要約を掲載した。ロックとは、ロックのオランダ亡命中に知り合い、ロックの原稿を得てそれを自分がフランス語に訳し、*Methodes Nouvelles De dresser des Recueils Communiqués par l'Auteur* を *Bibliothèque Universelle* 第2号 (1686.7) に、『人間知性論』要約を同誌第8号 (1688.1) に掲載した。また、Athenian Societyの刊行物で、John Norrisの『人間知性論』批判に反論した。しかし、*Bibliothèque Choisie* 第13号 (1707) に掲載したロック『パウロ書簡 義訳と注』の要約・評論では、パウロ書簡理解に対する本書の貢献を認めながらも、ロックの理解には不十分な点があることを指摘している。そのほか、エラスムスの著作集、グロティウスの *De Veritate Religionis Christianae* (1709) を編集刊行した。

宗教と統治とは、人間の幸福を共通の目的としているし、世俗権力の源は神にある。更に、宗教は、誓約を守る義務を人間に植えつけ、人間社会に反する考え、原理を正し、戦争、不和を助長する欲望、情念を人間の心から取り除くことによって、統治の最善の基礎である。(第6章)

このような考えを基にして、本書には、からだ (からだに基づく情念) を重視し、魂を軽視しすぎたエピクロス派批判 (第2章, 第7章付論参照), 前述のようなホブズ批判 (序, 第1章, 第5章, 第6章, 第8章), ホブズ批判と結びついたマキアヴェッリ批判 (第5章, 第6章), スピノザ批判 (第2章), グロティウス批判 (第6章) などがある。

ホブズの誤りの根本は、彼の人間論にある。即ち、ホブズは、「人間は社会にふさわしいように生まれついてはいない」と考えていること、「個人の利益」、「自分が生き続けること」を大前提として、あらゆる悪業、不正を法に適用ものとしていること、従って、「自然法は、人間を義務づける法というよりは、単に人間を平和へと向かわせる原則にすぎない」と考えていることにある。このような人間論を基にして、「自然状態は戦争状態である」、「善・悪、正・邪の区別は、世俗為政者の意志に基づいている」といったホブズの考えが出てくる。マキアヴェッリの「君主は、自分や国家の利益のためには、誓約や正義・名誉の法を破ってよい」という考えは、このホブズの根本の考えと通じている。また、人間には、父と子との関係に基づく、従属関係、服従の義務があるから、「自然状態は対等の状態である」というホブズの考えは誤りである。(第5章, 第6章)

ホブズの宗教論としては、「闇の国」論における聖書理解の中から、「この世の教会は、聖書にある神の国ではない」——ホブズは、旧約における神の国設立を現世の王国設立と同じように考えているけれども、神の統治権は人間の選択と意志によるものではない。人間は、キリスト教の信仰告白によって、神との暗黙の契約を立てたのであり、旧約の神の国の場合と同じ意味で、そこにはキリストの国が立てられたのである。——と「魂の不死及び魂はからだとは別のものであることの否定」が取りあげられて、批判されている。(第8章)

ロック *HU* に関しては、これらのホブズ批判とは直接関係づけられずに、しかし、無神論 (理神論) 批判と関連させて、三点、即ち、1. 徳・悪徳を称賛・非難に基づかせているところ (読者への序)、2. 「生まれながらの原理はない」という主張 (第3章)、3. 一般公準についての考え (第3章) が批判されている。しかし、ロックの神の存在証明は評価されている。(第4章)

ロウドは、キリスト教を前提としており、神は人間に明確、明瞭な知覚において誤らせるような能力を与えてはいないと考えて、理性を真理知覚の能力として重視している。人間論、道徳論では、ロウドの考えは、自然状態における対等を否定している点を除けば、基本的な点で実質的にはロックと共通する考えである。宗教論でも、福音の完全に到るためには、信仰と悔い改めが必要である、この世の教会は神の国である、自然法と正反対のことが啓示されることはない、など、ロックと共通する考えがかなりある。しかし、そこでは、正統のロウドとそうでないロックとの違いは明らかである。また、宗教論以外でも、ロウドは、「自然状態には父と子の関係に基づく従属関係があり、自然状態は対等の状態ではない」と考える点（この点では、ホッブズとロックの考えは同じである）、世俗権力の源は神にあるとして、宗教を統治の基礎としている点で、ロックの考えとは明らかに違いがある。ホッブズの人間論に対するロウドの批判の基本、また、この人間論の誤りがホッブズの統治論、宗教論の誤りの根本であるというロウドの指摘は、ホッブズの考えを体系的に取り上げたものではなく、断片的な個所に対する批判ではあるけれども、大筋の議論としては妥当である。宗教論においても、ロウドが神の国、キリストの国を現世の国とは区別して、神の新しい約束the New Testamentを基にして、各人が神に信仰告白をするということが神の国の構成員になるという契約を立てることである、と考えている点は、妥当である。

ロウドの上述のロックHU批判に対して、ロックがHU第2版（1694）のThe Epistle to the Readerの中に挿入した（第5版（1706）では、II, XXVIII, 11. の注として移し置かれた）応答の趣旨は、次の通りである。

1. 学問法〔世論あるいは評判法〕について

「〔第2巻第28章で〕私がしようとしたのは、道徳規則を明示することではなくて、道徳観念の起源と本性を示して、人々が道徳関係において使っている規則を、それが正しいか間違っているかに関わりなく、列挙することであった。」従って、ロウドが、ロックはここで「徳を悪徳に、悪徳を徳に」しようとしている〔Lowde, The Preface.〕、と言っているのは、誤解に基づいている。私はここで、不変の自然法が道徳の正邪を判断すべき基準であり、〔人間にとって、自分の利益になるものをよしとし、その反対のものを批難することほど自然なことはないから、人類の一般的な善を確保し、推し進める自然法に従うことは、大抵の場合に人々に正しいと評価されるのは当然である（HU, II, XXVIII, 11.）〕という理由によって、人々は行為の徳、悪徳を判断する時に、大体において自然法からあまり離

れてはいない、ということを示している。

2. 生まれつきの観念について

ロウドは、生まれつきの観念は「幾つかの他の事情〔外的感覚、心の開発など〕が共に働くことに基づいている」〔Lowde, III, pp. 52-53. p. 78.〕と言っているから、実際には私の考えと違ってはいない。

ロウドの批判の第1点に関しては、*HU*, II, XXVIII, 11.での上述の説明は、人間全体の幸福と個々の個人の利益とを混同している〔妹尾『コミュニケーションの主体の思想構造——ホプズ・ロック・スミス——』216-217頁〕から、ロウドのロック批判の第1点には、妥当なところがある。しかし、第2, 第3の点では、ロックの主張に明らかに分がある⁴³⁾。

2. F.B. [ジョン・エドワーズ]『最近の論争に対する自由しかし穏健な判定』1698.

F.B. [John Edwards⁴⁴⁾], *A Free but Modest Censure on the late Controversial Writings and Debates of The Lord Bishop of Worcester and Mr. Locke : Mr. Edwards and Mr. Locke : The Hon^{ble} Charles Boyle, Esq ; and Dr. Bently. Together with Brief Remarks on Monsieur Le Clerc's Ars Critica* (『最近の論争的書物と論争に対する自由しかし穏健な判定：ウスター主教殿下対ロック氏, エドワーズ氏対ロック氏, チャールズ・ボイル閣下対ベントリイ博士。ル・クレール氏の*Ars Critica*に対する短評を付す。』), London, A. Baldwin, 1698. (*F.M.*と略記する)には、次のように書かれている。

1. スティリングフリート-ロック論争

ロックは、ソツツイーニ派であると自分から公言はしていないけれども、少なくともソツツイーニ派の友人, 支持者であると思われるし, また, ソツツイーニ派から支持, 評価されている。

43) ロックのロウドに対する応答についての部分は、妹尾剛光『ロック-スティリングフリート論争』関西大学経済・政治研究所 研究双書第110冊, 1999.V注31の最後の文章に加筆したものである。

44) *DNB*, Vol. VI, p. 540(John Edwards). による。

ステイリングフリート『三位一体の教え弁護論』[1697]第10章は、ロックHUの幾つかの箇所は三位一体その他のキリスト教信仰の神秘にとって有害であり、神秘に対する熱烈な反対者〔John Toland〕によって、これらの神秘と対決、対抗するために使われてきた、即ち、この神秘反対者は、「明確、明瞭な知覚（観念）を持っていないことの真理を確実とすることはできない」と主張しているとして、ロックのこの考えを吟味し、これに反論した。『ロック〔第一、第二〕書簡に対する回答』[1697,1698]では、ロックの考えを詳しく検討して、「観念の明確さは、理性と確実性の唯一の基礎ではない」ことを証明し、観念についてのロックのそれ以外の幾つかの主張の根拠のないことを示し、また、彼の考えの自己矛盾を証明した。

その上、ステイリングフリートは、ロックは懐疑論者であり、キリスト教信仰箇条の主要なものの幾つかを覆そうとしていることを示している。即ち、ロックは、知識の確実性を取り去り、「人間という観念はない、われわれが人間であるということは確実ではない」(HU, III, VI. IV, VII.)と考えている。彼のいう観念からは神を証明できない。人間の中に物質以外の力（原理）を認めない。従って、神に関しても同じ考えとなる。復活の時と死んだ時とのからだの同一性を認めない。キリストにおける二つのNaturesは疑問であるとし、三位一体、受肉を信じない。信仰の確実性を否定している。

以上のステイリングフリートの議論に対するロックの反論には、実質的な回答は何もない⁴⁵⁾。

2. エドワーズ-ロック論争

ロックは考え深い人であるけれども、間違った原理、意図に導かれているために、キリスト教信仰箇条の中で、本当のキリスト者になるために信じる必要があるのは、一つ、即ち、「イエスは救い主である」だけである、使徒書簡は、人間をキリスト者にする基本的信仰箇条を教えようとしたものではない、三位一体、救い主の贖罪などは基本的信仰箇条ではない、と主張する。この主張は、しっかりとした根拠がなく、聖書やそれ以後のキリスト者の考えに反している。その上、エドワーズらが示したように、「唯一つの信仰箇条」という考えは、「人間の魂の物質性」という考えと同じく、ホップズの『市民論』、『リヴァイアサン』から借りてきたものである。

ロックの考えは、だらしのない原理に従う人々、懐疑論者、理神論者の間で評判がよい。エドワーズ『無神論の原因・誘因についての考察』[1695]は、ロックのこの考えの弱さ、

45) F.M., pp. 4-8.

愚かさ、不条理、はなはだしい危険を明らかにした最初の書物であり、『ソツツイーニ主義の仮面を剥ぐ』[1696]は、キリスト教会の構成員となるためには、「イエスは救い主である」以外にも必要な幾つかの信仰箇条があることを証明している。

更に、エドワーズは何も言っていないけれども、ロックの『教育に関する考察』の中には、役に立ち、称賛すべきことも書かれている。しかし、そこにはキリスト教のことは何も書かれていない。

キリスト教信仰箇条、使徒書簡だけでなく、大学、パブリック・スクール、聖職者を侮辱しているロックに対する、エドワーズの厳しい、率直な批判は正当である⁴⁶⁾。

F.B. [ジョン・エドワーズ]の1. 2.の以上の議論は、スティリングフリートとエドワーズの言い分をほぼ全面的に認めて、ロックの言い分を全く取り入れていない。こうしてロックは、教育論については評価されているところがあるけれども、ソツツイーニ派の支持者とされ、ホップズと同じ考えを持つ懐疑論者であると断定されている。

3. ボイル-ベントリイ論争

チャールズ・ボイルCharles Boyle [1676-1731] 編集校訂の*The Epistles of Phalaris* [1695] [Sir William Templeにより、近代人よりもすぐれていた古代人の一例証として挙げられたPhalarisの書簡のこの校訂本序文で、ボイルは、国王図書館管理人 [ベントリイ] のこの書簡写本貸出に関する不親切を批判した]。これに対するリチャード・ベントリイDr. Richard Bentley [1662-1742] の‘*A Dissertation upon The Epistles of Phalaris, Themistocles, Socrates, Euripides; &c. and Æsop’s Fables.*’ [William Wotton, *Reflections upon Ancient and Modern Learning*, 2nd ed., 1697.への付論。ボイルの中傷に反論するとともに、この書簡集は編者としてボイルの名だけを挙げていたにもかかわらず、“our editors” が校訂したこの書簡は後代の偽造であると主張した]における反論。これに対する反論Boyle, *Dr. Bentley’s Dissertations on the Epistles of Phalaris, and the Fables of Æsop, Examined by the Honourable Charles Boyle, Esq.* [1698] は、ベントリイに対する強烈な人身攻撃を行ない、ベントリイを罵倒した。このベントリイ批判は真実とは言えないけれども、私は虚偽とは断定しない。しかし、

1. ボイルは、ベントリイに対する批難にあるのと同じく、「学をひけらかしている」。

2. ベントリイの「育ちの悪さ」[ヨークシャーのヨーマンの、第二の妻との子]を批難しているけれども、優れた教育 [St. John’s College, Cambridge] を受けた人の育ちをけなす

46) *F.M.*, pp. 8-16.

のは、良家の出にふさわしい、よい作法とは言えない。

3. ベントリイが高貴な人の庇護を受けたということ〔1682年からEdward Stillingfleetの次男Jamesの家庭教師。なおベントリイは、Stillingfleetの死後、彼の著作集（6巻、1707-1710）を編集刊行した〕、St. James's宮殿の図書館管理人であること〔1694年5月から〕、聖職にあること〔1690年聖職に入り、ウスター主教のchaplainとされ、1695年には国王付chaplainとされた〕を批難しているのも、おかしい。

4. ボイルが批難していることは、ほとんどが小さな事ばかりで、それらの事に何故これほど激昂するのかは、わからない。

5. 脅迫的言辞があちこちに見られることは、「ボイル氏が著者ではない」というベントリイの意見が正しいと〔断言はできないけれども〕私にも思わせる⁴⁷⁾。

4. Le Clerc, *Ars Critica*〔1696.第2版1698〕

ヘブライ、ギリシャ、ラテンの著者たちの言葉の批判的吟味という形で、実はソツツイーニ主義（ユニテリアン主義）を説いている。しかし、主教ピアソンPearsonやステイリングフリートの批判に対して何も答えていない⁴⁸⁾。

ロウドとエドワーズ両者のロック批判は、ロックを無神論（理神論）（ロウド）、懐疑論者、ソツツイーニ派（エドワーズ）と結びつけた批判である点に共通性がある。両者共、札つきの無神論者としてはホップズを挙げており、より厳しくロックを批判するエドワーズは、ホップズとロックとは基本的な考えにおいて同じところがあることを指摘している。こうして両者共、ロックとホップズとは、大きく見れば、正統のキリスト教の考えに対立するところがあるという点で同じ考え方の思想家であると考えている。同時に、それにもかかわらず、ロックは、ホップズと違って、役に立つ、正しいことを書いているところがあると云っているところにも両者の共通性がある。

—— 2000.5.24 受稿 ——

47) *F.M.*, pp. 16-21.

ロックは、古代人对近代人の論争に関しては、*Valedictory Speech as Censor of Moral Philosophy* (1664) では、古代礼賛派を批判している (*LN*, p. 225.) けれども、*Of the Conduct of the Understanding* [1697-] では、真理は時代によって変るものではない、として、古代人だけが、あるいは、近代人だけが知識を見出したという考えは、偏愛に基づくもので、根拠がない、と書いている (*CU*, 24, pp. 246-247.)。

48) *F.M.*, pp. 21-31.